短期派遣 EUROPA 派遣報告書

博士後期課程

松澤　水戸

スイス、ジュネーヴ大学への派遣の成果をここに報告いたします。

１．派遣受け入れ先

スイス、ジュネーヴ大学文学部内 ELCF(École de langue et de civilisation françaises)

２．派遣期間

２010年9月１日から2011年1月31日の5ヶ月間

３．派遣目的(A1 と A2)

A1 Laurent Gajo 教授から学習者コーパスの構築とそれを利用した研究手法について指導をいただくこと

Gajo 教授は言語の多様性、複数言語の習得、2言語教育、言語習得、学校や病院などでの言葉のやり取りについて研究を進め多くの研究実績を持つ研究者で、ジュネーヴ大学においては以下の内容について学生を指導しています：外国語習得、外国語としてのフランス語の教育、教室での言葉のやり取り、言語政策など。Gajo 教授は、自身の研究（例えば、Gajo, L. (2008). L'intercompréhension entre didactique intégrée et enseignement bilingue. In Conti, V. & Grin, F. (dir.), S'entendre entre langues voisines : vers l'intercompréhension (pp. 131-150). Genève : Georg.）で学習者コーパスを用いて具体的なデータを提示する手法で研究を行う点、また、公用語が4言語あるスイスで、フランス語の学習・教育研究に精通している点において、母語が異なるフランス語学習者コーパスの構築および分析方法を師事するにあたり最適の人物と考えています。

A2 フランス語学習者音声コーパスの構築のため、Isabelle Racine 教授らが世界中で実施計画中の IPFC へ協力すること

Racine 教授はフランス語の音声学と音韻論が専門の研究者で、「現代フランス語の中間音韻論：Interphonologie du français contemporain（以下、IPFC）」計画の参画者の一人です。この IPFC は、世界中の、母語がフランス語ではない地域におけるフランス語学習者の話し言葉コーパスの構築を実施しており、本学の川口裕司教授と早稲田大学の Sylvain Detey 教授も参加しています。継続的かつ一貫性のある手法で中間言語としてのフランス語の音声的・音韻的データを収集することで世界中のフランス語学習者のデータが比較可能となります。さらに、IPFC はそ

の母体となる「現代フランス語の音韻論：Phonologie du français contemporain（以下、PFC）」計画に基づいているため、PFC が収集する世界中のフランス語母語話者のデータとの比較も可能です。これらのデータを積極的にフランス語教育に活用するという IPFC、PFC の姿勢は、学習者コーパスをフランス語教育・学習に大いに活用したいと考えている私と同じものです。日本人フランス語学習者は、日本語には存在しない音や日本語では区別しない複数の音の弁別が苦手とされているが、同様のことはスペイン人学習者にもあてはまります。世界中の学習者のコーパスが構築されるということは、世界中でその分析を行なえるということで、例えば、フランス語圏ではない日本とスペインのフランス語教育を共通のデータを足がかりに協力して発展させていくことも考えられます。

4. 追加目的(B1 と B2)

B1 今後の研究への助言を Bertrand Sthioul 教授からいただくこと

Gajo 教授と Racine 教授から、彼らの同僚でフランス語の動詞研究が専門の Bertrand Sthioul 教授を紹介してくださいました。そこで、Sthioul 先生から助言をいただき、2011年に実施予定の複合過去（PC)と半過去（IMP)の2時制の使い分けに関するタスクの問題を完成させます。

B2 Jean-Marc Luscher 教授の授業への参加して、今後の研究に役立つ知識を得ること

Luscher 教授は文法研究が専門で、ELCF の夏期講習の責任者です。Luscher 教授の授業へ参加することを許可していただいたので、ジュネーヴ大学における、外国語としてのフランス語教育の現状と教育法、教材について学びます。

5. 成果

派遣目的 A1 の成果

Gajo 教授は、実際の会話を収録した映像データをコーパス化して研究に利用しているだけでなく、授業でもコーパスをいわば教材のひとつとしても利用しています。この授業に参加し、教材としてのコーパスを実際に体験しました。PC 上から教室へ投影されたコーパスは、多くの学生に即座に画面構成や使用方法がわかるような姿、そして、音声とそれを文字化したテキスト、映像を検索できるという高い実用性を兼ね備えたものでした。コーパスの公開は自分の研究成果を社会へ還元するひとつの手段であると考えます。私がこれまで収集してきたフランス語の複合過去と半過去の使い分けのアンケートデータを「使い勝手のよい」検索機能を備えたコーパスにすることを目指します。データ提供者の個人情報をしっかり保護できるかどうかが非常に重要な問題なので、第一段階としては、コーパス内にデータ提供者のいかなる情報も載せず、また、広く一般公開するようなことはしません。例えば、2時制の使い分けについて学習したばかりの本学のフランス語専攻の学生が、単なる用例としてではなく、2時制の使用にあたって、どのような文脈において他の学習者やフランス語母語話者でさえも意見が分かれるのか、といったことを知ることができれば学習の役に立つと考えます。

派遣目的 A2 の成果

Racine 教授への協力として、IPFC がフランス語学習者の音声データを収集するためにアンケートとタスクを Moodle（e-learning 教材の開発および管理ソフト）を使って作成する作業に参加しました。同じオペレーション・システムおよびソフトであっても、日本語版では正常に作動するプログラムがフランス語版では作動しないということがありましたが、Moodle を利用した経験からこれらの問題を解決することができました。Racine 教授がスイスおよびスペインにて実施予定のスペイン語母語話者用の完成をもって、以後、その一部を変更するだけで他の母語話者用のタスクを用意することができるようになり、ジュネーヴでの作業は一段落となりました。そして、この作業の締めくくりとして、2010年12月8日にパリにて開催された、IPFC の2010年度の学会に参加し、Moodle を利用してインターネット上でデータ収集を行う場合の利点と注意点、タスクの画面構成や操作方法についての発表を行う機会を得ました。

日本帰国後も協力は続けており、スペイン語母語話者用に加え、ノルウェー語母語話者用、ドイツ語母語話者用の準備が整い、実際にデータ収集が可能となりました。現在は、Moodle 上に収集されたデータを効率よく管理・利用するための準備を行っています。また、イタリアおよびカナダの研究者が参加することとなっています。

追加目的 B1 の成果

Sthioul 教授の授業は2010年の秋学期には実施されなかったため、定期的に会うことはできませんでしたが、これまでおよびこれからの研究について大きく分けて以下の3点の助言をいただきました。

1．長文の中から切り出されたような、もしくは、非常に人工的に作られたような1～3文章では、限られた文脈をどのように解釈・補足するかによって、複合過去形（以下、PC）と半過去形（以下、IMP）の両方が使用可能な問題がありうる。よって、長文の問題等を作成し、文脈をよりはっきりと限定するべきではないか。

→ Sthioul 教授には前もって説明しませんでしたが、1～3文という短い文章だけによる穴埋め問題を行うことについては、川口教授と議論を重ねていました。長文を用いることは、タスクの実施が非常に長時間になるため、実施自体が困難になるという懸念と、長文のどこかで文意を誤解した場合、それが他の部分、場合によっては問題全体に影響することで芋ずる式に「間違い」が増えることがありうると考えました。また、少ない文脈情報への対処として、タスクの各問題に日本語の意味を付加し、文脈を限定することも検討しましたが、先行研究では付加していなかったため、それに準じました。しかし、Sthioul 教授のご指摘どおり、文脈情報が減れば、解釈の多様性が増すことは避けられません。もちろん、タスクで用いた文章は適当に作ったわけではなく、すべて Glieman, M.-F.(2006). Les exercices de grammaire A2, Hachette Education の練習問題や例文から注意深く選別しました。しかし、例えば、Tous les soirs, elle (racontait) des histoires et nous (s'endormions) en imaginant que nous (étions) des princes courageux ou de belles princesses.という文章では、Tous les soirs「毎晩」という表現から、その教材では、過去の習慣をあらわす IMP を3つ使うことを「正解」としていますが、フランス語母語話者である Sthioul 教授には、過去の出来事を列挙する PC を3つ使った表現も決して不自然ではないそうです。このように、フランス語母語話者の意見を聞くことに関して、川口教授、敦賀教授からその重要性についてご指摘いただいておりました。当然のことではありますが、初級学習者向けの教材よりフランス語母語話者のほうが言語表現の「許容範囲」が広いこと、そして、フランス語母語話者でさえも文脈情報が少なけれ

ばPCとIMPの選択には複数の可能性があることがわかります。よって、極端に解釈すると、上級学習者であっても文脈情報が少なければ、時制の選択を「間違う」ことがあり、文脈情報がはっきり提示されているにもかかわらず、時制の選択を「間違う」学習者は2時制をしっかり習得できていないか、文脈情報を理解するための語彙知識が不足しているか、注意不足であるということになります。

2. 文脈の捉え方しだいで、意味は変わるものの2時制のどちらも使える場合、どちらか一方の時制の使用を「間違い」であると断じてよいのか。教科書や教師が「期待」する概念・用法以外の解答を学習者がする可能性があるのではないか。

→ この穴埋め問題の解答の分析では、2つの先行研究 Kim(2002)と Whatley(2010)の「正解」と「間違い」の定義を大いに活用しましたが、「正解」と「間違い」という分類を見直すか、調査方法を変更する必要があると感じました。私が注目したいのは、「間違い」をみつけたり、正したりすることではなく、学習者がPCとIMPの使い分けにおいて混乱するのは、どのような「使用場面」なのか、ということなので、今後は「正解」と「間違い」ではない別の表現に改めようと思います。調査方法を変更する場合、Sthioul 教授のご指摘どおり、よりはっきりと文脈を限定したタスクを用意しなければなりません、先行研究のように長文を用いることが考えられます。

3. フランス語母語話者に対しても同一タスクを行い、その解答をフランス語学習者の解答と比較することは有効ではないだろうか。

→ 日本人学習者がまだ習得していない表現や日本で用いられる初級学習者向けの教材には載っていないような表現であっても、フランス語母語話者ならば意味の微妙な違いをはっきりと認識して使用できることから、フランス語母語話者の解答の傾向は日本人学習者の解答の傾向と異なることが予想されます。どのような「使用場面」で異なるのか、また、同じなのか、ということには非常に興味があり、協力者を得られればぜひ実施します。

Gajo 教授、Racine 教授、Sthioul 教授に限らず、ELCF に所属してフランス語以外の言語の母語話者に対するフランス語教育に実際に携わっている方々から、PCとIMPの使い分けが学習困難点となる学習者は多いと聞きました。PCとIMPの使い分けに関する研究が日本人学習者以外にも役立つ可能性があることは私にとってこの研究のやりがいのひとつです。

追加目的 B2 の成果

Luscher 教授の Didactique de la grammaire という授業に参加しました。これは、言語教育において、文法教育は文法知識だけでなく言語能力を向上させるものでなければならないという観点から、母語としてではないフランス語の学習における文法教育を分析する授業です。この授業では、日本語の「誤りを犯す」という強い表現では表しきれない非常に微妙な次元のエラー、つまり、文法的には不適切だが、文脈的には理解しうるエラーは、フランス語母語話者や上級学習者といったフランス語熟練者でさえしうるもので、そこには結局、ことばの意味が関わっていることを勉強しました。

例1 La fermière a vendu la vache parce qu'elle était malade.

代名詞 elle が fermière のことなのか、vache のことなのか、この文章だけでは判断できないので、以下の2つの解釈が可能である。

解釈1：農婦は病気だったので雌牛を売った。

解釈2：農婦は雌牛が病気だったので売った。

例2 La plupart des planches d'ébène sont blanches.
和訳：大部分の黒檀の板は白い。（黒檀が白いのは単なる冗談だそうです）
主語 plupart は女性単数形なので、sont blanches 部分は est blanche と単数形にするほうが文法的というか純正語法主義的には正確であるが、その意味が「大部分の～」であるため、複数形を用いることに抵抗がないフランス語話者が存在する。
これに関して、小学館ロベール仏和大辞典には以下のような言及がありました。
「la plupart des + 複数名詞」を主語として用いる場合、動詞は複数形にする
「la plupart de + 定冠詞 + 単数名詞」を主語として用いる場合、動詞は単数形にする

また、この授業の一環として、ジュネーヴ大学の修士課程や博士課程に在籍する学生が、条件法についての模擬授業を行ったとき、教師役の学生がした説明が非常に興味深いものでした。彼は条件法現在形の形態について「単純未来形の語幹に半過去の活用語尾をつける」という日本でも一般的な説明をし、さらに条件法の機能にはその形からも明白なように半過去の「未完了性」が影響している、とはなしを続けました。しかし、母語がフランス語以外で、条件法をはじめて勉強する生徒役の学生たちがわからないふりをしたため、途中で、半過去形、つまり、フランス語で imparfait を英語に置き換えて imperfect と言って「完了してないってことだよ。」と付け加えたのです。このとき、日本語の限界を感じずにいられませんでした。フランス語を学習する英語母語話者は、フランス語の imparfait は英語の imperfect に対応しているということはおそらくすぐに理解でき、よって、複合過去が担う「完了」表現に対して、imparfait が担う「未完了」表現を理解することもたやすいのではないかと思うのです（しかし、Whatley(2010)によれば、英語母語話者にとっても PC と IMP の使い分けは決して簡単ではないようです）。これに対して、日本では、imparfait は「半過去」と呼ばれています。「半分過去って、じゃあ、あと半分はなに？」というのは、私が高校でフランス語を教えていたときには避けられない質問でした。この表現は明らかに英語の imperfect よりもわかりにくいと感じます。「英」語の表現はまったくといっていいくらい頓着せずに非常に合理的にアメリカから導入できるのだから、いくら「同盟」関係ではないとはいえ、parfait というデザートをパフェと呼んでいるくらいなのだから、フランス語ももう少し導入してもよいのではないでしょうか。

6. 目的以外の注目点

Racine 教授は専門が音声学なので、ジュネーヴ大学において、フランス語の発音クラスを担当しています。この授業では、母語がフランス語以外の学生が、彼らにとっての学習困難点となりやすいフランス語の発音について自律学習することができます。学生はこの授業に登録すると、まず、発音チェックを受け、個々に助言をもらい、週3日4時間開放されるラボ教室へ自由に入室できるようになります。そして、自分で3段階区分の e-learning タスクを選び、自分のペースで進めていく。学生の発話は PC 上に仮に録音され（授業後に自動削除され）るので、聞きなおすことができます。ラボ教室では教師が待機しており、学生からの質問に答えたり、要望があれば発音についての助言を与えます。このような e-learning 教材は、例えば、フランス語母語話者の教師が少ない傾向にある日本のフランス語学習において有効で、大都市にいる教師が日本各地の学習者の発音学習をインターネットを介して手助けすることも可能だと考えます。

7．今後の計画

上記の「追加目的 B1 の成果」にて提示した Sthioul 教授から3点の助言を参考に、2011年実施予定の2時制の使い分けアンケートは以下のように計画を進めています。

長文タスクを用意しました。長文の引用先は、文学作品等のほうが教材に比べて表現に制限がない分自然な表現のフランス語を用いた自然な展開の文章が望めますが、フランス語母語話者に実施する場合には、彼らがその文学作品を知っているかどうかが回答に大きく関わるのではないかという懸念があります。

長文の例（Sempé. J-.J. et Goscinny. R. (1999) Le petit Nicolas. Folio Junior 940. Edition Gallimard Jeunesse. pp. 45-46)

En sortant de l'école, (j'ai suivi) un petit chien. Il (avait) l'air perdu, le petit chien, il (était) tout seul et ça (m'a fait) beaucoup de peine. (J'ai pensé) que le petit chien serait content de trouver un ami et (j'ai eu) du mal à le rattraper. Comme le petit chien (n'avait) pas l'air d'avoir tellement envie de venir avec moi, il (devait) se méfier, je lui (ai offert) la moitié de mon petit pain au chocolat et le petit chien (a mangé) le petit pain au chocolat et il (s'est mis) à remuer la queue dans tous les sens et moi je (l'ai appelé) Rex, comme dans un film policier que j'avais vu jeudi dernier.

Quand (je suis arrivé) à la maison, maman (n'a pas été) tellement contente de voir Rex, elle (n'a pas été) contente du tout. Il faut que c'est un peu de la faute de Rex. Nous (sommes entrés) dans le salon et maman (est arrivée), elle (m'a embrassé), (m'a demandé) si tout s'était bien passé à l'école, si je n'avais pas fait de bêtises et puis elle (a vu) Rex et elle (s'est mis) à crier : << Où (as-tu trouvé) cet animal ? >>

そして、Kim(2002)では上級フランス語学習者に時制選択の根拠を尋ねていたので、この研究の成果との比較を目指して、この長文タスクでは、学習者に時制の選択根拠についての質問を予定しています。以前、学生相手に記述式の自由回答で選択根拠に関する質問を実施したところ、「何を答えたらいいのかわからなくて回答しにくい」という意見があったので、今回は、複数回答可の選択式を用いる計画です。しかし、このアンケートの対象者は初級フランス語学習者であるため、選択の強制力を弱めるために入れてある選択肢「なんとなく、もしくは、まったく理由なく選んだ」を選ぶ可能性が高いと言う問題があります。この点については、Sthioul 教授にぜひ意見を伺いたいと考えています。

選択肢の例

その時制を選んだ理由を教えてください。下記の選択肢の中からいくつでも選んで〇をつけてください。ただし、選択肢4または5を他の選択肢と一緒に選ばないでください。

1．その動詞の意味から考えて選んだ（Aktionsart に関わる選択肢の例）

2．その時制が持つ過去表現の種類から考えて選んだ（Aspect に関わる選択肢の例）

3．文脈、つまり、その動詞以外の部分も考慮して選んだ（Premier Plan と Arrière-Plan に関わる選択肢の例）

4．なんとなく、もしくは、まったく理由なく選んだ（上記3種類の選択肢に強制的に誘導しないようにするための選択肢の例）

5. 選択肢1～4以外の理由で選んだ

また、2010年に実施したアンケートでは、回答の選択肢は、各動詞に対して、PC か IMP のどちらかしか選ぶことができませんでしたが、これに修正を加え、2011年のアンケートでは、組み合わせで回答する形式にして、フランス語母語話者から「どちらの時制も使うことができると思う」との意見が出た問題に対応する計画です。そして、日本人学習者のデータとフランス語母語話者のデータの傾向を比較分析します。ここで選択肢に順位をつけられるようにすべきかを今後検討します。

2011年版アンケートの例
以下の文のかっこの中にある動詞を複合過去か半過去に活用させる場合、どのような組み合わせがもっとも適切（自然）な表現だと思いますか。選択肢から１つ選んでください。
Tu [1](sortir) la voiture du garage. À ce moment-là, un pneu [2](éclater).

選択肢１：[1]を複合過去にして、[2]も複合過去にする
選択肢２：[1]を複合過去にして、[2]を半過去にする
選択肢３：[1]を半過去にして、[2]も半過去にする
選択肢４：[1]を半過去にして、[2]を複合過去にする

このように2010年に収集したデータおよび2011年に収集予定のデータを分析することで、日本人フランス語学習者のPCとIMPの選択に関する傾向の分析を進めていき、博士論文へとまとめあげます。フランス語母語話者のデータが必要量収集できるかどうかが非常に重要な課題であるため、ジュネーヴで得た人脈が本研究に大きく影響することになります。

8. 先行研究

Kim, J.-O. (2002). «L'analyse des valeurs du passé composé et de l'imparfait par des apprenants coréens», Études de linguistique appliquée, no 126, avril-juin 2002, pp. 169-179.

Whatley, M. (2010). L'enseignement de la distinction passé composé/imparfait aux apprenants anglophones de FLE : un test de deux explications dans la salle de classe, Congrès Mondial de Linguistique Française – CMLF 2010, Paris, Institut de Linguistique Française.